

精神障害をもつ独居女性を どう支えていくか

● スーパーバイザー ●

奥川幸子（対人援助職トレーナー）

● 事例提出者 ●

Tさん（権利擁護センター・生活支援員）

● 事例の概要 ●

クライアントは公営団地に住む独居女性。H16年8月に非定型精神病で入院し、入院中に夫が他界。権利擁護センターは入院中からかわり、夫の相続などの支援をしてきた。H17年1月に契約。当初は前任者が生活支援員としてかわる。同年9月に支援員交代となり、事例提出者が支援に入るようになった。

● 提出理由 ●

以前から地域福祉権利擁護事業で通帳をお預かりしていることにストレスを感じていたようだが、最近になり「自分でやっていきたい」と言われることが多くなった。現在は精神科の病院が変わったり、夫の相続や生命保険の解約金など大きなお金がたびたび入ったり、生活支援員が交代したりと環境の変化がある。病気に対しても否定したり、「介護保険を卒業したい」という発言も聞かれる。今後、地権事業がかかわっていくにはどのようにしたらよいかを考えたい。

● 事例内容 ●

Sさん・69歳・女性

相談経路

H16年10月、行政の障害福祉課の担当ワーカーより相談が入る。「現在Y病院に入院中で、退院後の生活が不安。同年8月に夫が亡くなり、それまでは金銭管理や家事など夫が支えてきたため、一人では生活ができないのではないかと。現在は知人（宗教関係の方）が金銭管理などすべてを行っている」

治療歴など

診断名：非定型精神病

H16年8月にY病院に入院。同年10月に退院し、その後5週間に1回通院していたが、H18年2月より近所のクリニックに転院する。

最初に発症したのは、高校生のとき（本人「高校の先生が厳しくて発症した」）。その後、40歳のとき、うつで入院。52歳のとき、注釈妄想・睡眠障害で約2週間入院。57歳のとき、上記同様の症状で約1カ月入院。68歳のとき、非定型精神病で約2カ月入院。

H12年から通院が途絶えていたが、特に服薬なしで過ごす（夫がかなりカバーしていた様子）。

H15年冬、夫ががんで余命半年と宣告を受け、その頃から夜眠れなくなる。H16年7月に夫が入院。その後、食事がとれなくなり、「玄関や部屋の窓から監視されている」と言ったり、工事の音などを「爆発だ！」と言うようになった。8月10日、家を飛び出そうとしたため、近所の方が安全を守れないと判断し入院となった。

退院後の様子



全国各地で行われている事例検討会の模様を誌上で再現します。検討会及び事例の内容は、プライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました。

退院後は落ち着いていた様子だったが、H17年9月頃より「向かいの部屋の人が気味悪い」と言い始め、その頃からあまりよい状態とはいえない。しかし、Y病院では状態が安定していると判断され、2月より近所の精神科クリニックに転院となった。

サービス利用状況

訪問介護：週2回（2時間／1回）→ケアマネと話し合い、2月から週1回になる。

地域福祉権利擁護事業：月2回（金融機関同行、書類整理）

生活歴等

東北地方にて生まれ育つ。高校を卒業後、地元の和菓子店に就職。夫とは22歳のときに見合いで結婚。夫の転勤（運送業）で現住所へ転居。20代後半に夫の影響で宗教に入信。

きょうだいとは長く疎遠だったが、夫が余命半年と宣告され、夫の病状が悪化するのに伴い、親戚付き合いは増えてきた。夫が亡くなってからは、保護入院などがあった場合に対応できるよう、妹が家裁に保護者の申し立てをした。

経済状況

厚生年金・遺族年金 約15万円／月
年金月に1カ月分の生活費を銀行からおろし、社協預かりの郵便局通帳に入金する。

住宅状況

公営団地の3階（家賃：約3万円）

● アセスメント時の状況（事例提出者のかかわり） ●

初回面接

H17年9月2日

専門員と同行（今後担当となる旨、挨拶をする）

9月15日

前生活支援員と訪問。金融機関へ同行。

クライアントの印象

大柄な女性で、お化粧をきれいにしている。知り合いに会うと自分から積極的に声をかけており、人見知りをあまりしないように感じた。

細かい金額や定期の満期日を正確に覚えている。

支援の引継ぎ事項

①医療面の情報を把握すること、②9月で定期積立が終了するため、10月以降の生活設計をご本人と一緒に考えること。

● その後の援助経過 ●

9月29日

専門員と訪問、夫の相続の手続きをする。「すっきりしたね」とホッとされていた。

10月15日

銀行へ同行。生活費6万円をおろす。いつものように半額を残さず、全額をおろし財布に入れる。口座に残さないのか聞くと「病院もあるし」とのこと。

11月7日

専門員と訪問、定期預金作成。今まで積立してきた1万5000円はもう積立せず生活費に回したいとのこと。

11月14日

専門員と同行訪問。「向かいの部屋の人がちょっと気味悪いの。夜中に銭湯の場所を尋ねて来たり、醤油を貸してくれと言ってくるんです」。少し不安定に見える。先月と同じく生活費6万円をおろし、

財布に入れる。「歯医者に行くし、全部もっています」

11月22日

ケアマネより連絡。Y病院の医師より「状態が安定しているので、近所のクリニックへ転院することを考えている」と連絡が入ったとのこと。

12月1日

専門員と同行訪問。11月14日より落ち着いて見える。生命保険の解約の手続きをする。「向かいの家の人は昨日も便の水を流していた」。管理人には話しているとのこと。

12月15日

生活費を増やして欲しいと言われる。相談の末、来月から生活費を3000円上げることになる。今月も口座には残さず、全額を財布に入れる。

12月25日

本人より連絡が入る。声は元気な様子。「次回の訪問は月初めに来てもらえるかしら？ 先日解約した生命保険の解約金が振り込まれるので。ちょっと100万円ほど使い道ができてしまったから。」使い道を聞いてみだが、「それは来てくださった時に話します」と言われる。

平成18年1月5日

訪問。100万円の使い道について聞くと「寄付です。去年もしました」。金額については「今年くらいしか大きなお金は入ってこないし、今回だけと思っています」。生活費の見直しをすると、医療費がかさんでいるので生活費を6万5000円にしたいということだった。また、最近友人から「元気になったし、一人でやりくりしてみたら？」と言われたとのこと。

1月15日

専門員と同行訪問。100万円についてももう一度話したが、意思は変わらない。金融機関へ同行し、生命保険解約金（200万円）のうち100万円を振り込み、残りを定期にした。

1月22日

ケアマネより連絡。本人が「ヘルパーの時間を減らしたい」と言っているとのこと。「介護保険も使いたくない、病気扱いされたくない」とも。ケアマネと本人が相談し、訪問介護を週2回から週1回に変更することになったとのこと。

2月5日

訪問。ヘルパーの話をする多弁になり、「どうせ私が辞めるとお金が減るからでしょ！ もう決めたんです！」と大きな声を出される。また、地権で預かっている通帳を返してほしいと言われる。

2月15日

専門員と同行訪問。今後のことについては、「もう元気だし、付き添いがいるのは恥ずかしいんです。私は宗教やっているし、手伝ってくれる人は多いので」。3人で話し合い、毎月2回の訪問の際に通帳を見せていただくことを条件に、今後3カ月間は通帳を本人へ返しやりくりしてもらおうことになった。

● 考察 ●

夫の相続が済み、地権事業を契約してから1年経ったことを何かの区切りにしていたのかもしれない。自分でやっていきたいと思っているところに、宗教関係者からも「なぜ権利擁護センターが入っているの？」ということを言われたようだ。



また、病院が変わったのを機に、本人から病気を否定する言葉がたびたび聞かれるようになった。もしかしたら、転院することで本人は本当によくなっ

たと思ったのかもしれない。今後、本人が、何ができて何ができないのかを、関係機関でよく話し合うことが必要ではないかと思う。

ケース検討会

奥川 ありがとうございます。前任の生活支援員から引き継いで5カ月ほどということですね。Tさん自身は、これまで地域福祉権利擁護事業（以下、地権）の生活支援員の経験や精神障害の方とかかわったことはあるのですか？

Tさん これまで相談援助の実践経験はなく、生活支援員になるのも今回が初めてです。精神障害の方とのかかわりも、この方が初めてです。

奥川 わかりました。では、Tさんがいま一番引っかかっているのはどんな点ですか？

Tさん 3カ月の期限付きで本人に通帳を持ってもらっているのですが、3カ月後にまた社協に預けていただけるかどうかという点です。ちょっと難しいかもしれないという気がしています。

奥川 そう思うのはなぜですか？

Tさん 今、社協では定期預金の通帳はお預かりしているのですが、ご自分で管理している月々の生活費（年金）はかなりのペースで使っておられるので、大丈夫かな、という心配があります。

奥川 でも、本人のお金なんですよ。

Tさん そうなんです……。かといって、あまり口をはさむと、ただでさえ「管理されている」と思われているようなので、よけいにうるさく感じさせてしまうかな、という気もしますし……。

奥川 なぜTさんは、相手に「管理されている」と思わせるほどの引っかかりを感じるのでしょうか。

Tさん 病気や宗教の関係もあるので……。

奥川 そこが引っかかっているんですね。

Tさん はい——。

奥川 では、今日はこの方のこれまでの生活を、

病気や宗教のことも含めて振り返り、今後の対応を考えていくということでもよろしいですか？

Tさん はい、よろしくお願いします。

友人との関係と地権事業のかかわり

奥川 では、まずはこのクライアントとTさんがどんな状況に置かれているのか、より詳しくアセスメントするための情報を共有していきましょう。ご質問をどうぞ。

発言 夫が亡くなった年齢は何歳ですか？

Tさん ご主人の年齢は聞いていません。ご本人より年上だったのは間違いのないのですが。

発言 遺族年金を受け取っておられるのですか。

Tさん はい。ご本人の厚生年金と遺族年金を合わせて、1カ月15万円ほどです。

発言 H16年8月10日に家を飛び出そうとして、近所の方が「安全を守れない」ということで入院になっていますが、その近所の方というのは宗教関係の方ですか？

Tさん はい、そうです。

発言 宗教関係の方は、ご本人とはどのようなかわりがあるのですか？

Tさん 宗教の会合に一緒に行ったり、時には食事と一緒にしたり、生活全般にわたって親密なお付き合いがあります。

発言 親密な付き合いがあるのはお一人ですか？

Tさん 複数の方がかわりをもっていますが、特に親しいといえるのは2、3人だと思います。

発言 宗教関係で日常的な出費はあるのですか？

Tさん 詳しいことはわかりませんが、年に1

回、寄付があります。身近な地域での会合も定期的にあるようですが、とくにお金が必要というわけではないようです。また、近所の方と一緒にマッサージなどを受けに行ったりしていますが、それは宗教関係の行事ではないようです。

発言 そもそも地権事業につながったのは、どういう経緯だったのですか？

Tさん 入院の手配や入院中の預かりもの、入院費の支払いなどはすべて近所の宗教関係の方が担っていらっしゃったのですが、ご主人が亡くなって相続に関する話が出てくると、やはりそこまでは対応できないということで、市の障害福祉課に連絡をとられたようです。その後、障害福祉課から地権のほうに相談が入ったという経緯です。

退院直後の状況について

発言 相続などについて、親族のかかわりはなかったのでしょうか？

Tさん もともとご本人、ご主人の親戚とも疎遠だったようです。ご主人のきょうだいは相続に関してはすべて放棄しています。ご本人のきょうだいとは、ご主人の病状が悪化して生活の不安が大きくなるにしたがって、お付き合いが再開したようです。ご主人が亡くなった後は、保護入院などがあった場合に対応できるように、妹さんが家裁に保護者の申し立てをしています。

奥川 相続放棄の手続きは誰がしたのですか？

Tさん ご本人はご自分で親族の方に連絡をしたので、それでOKと考えていたようですが、実際には書類がそろっていなかったために止まっていた、最終的に司法書士に入ってもらってまとめることができました。

奥川 基本的にそういった手続きをお年寄りが自分でするのは難しいですね。妹さんの保護申し立てのほうは通ったのですか？

Tさん はい、通っています。

奥川 それはいつですか？

Tさん 退院直後です。

奥川 自分で日常的なことができる人の申し立てがなぜ通ったのでしょうか。

Tさん う〜ん……。

奥川 退院直後のご本人の状況がどうだったのかということですが、どなたか角度を変えて質問してみませんか？

発言 退院直後から、訪問介護が入っていますが、ケアマネジャーはどういうニーズがあると判断したのでしょうか？

奥川 いい質問です。

Tさん そのあたりは聞いたことがないのでわかりません。私も最初はなぜ訪問介護が週2回も入っているのか疑問だったのですが……。

奥川 ここはとても大事なところですね。ご本人が退院したばかりのとき、どういう状態だったのか。日常生活のなかで、何ができて、何ができなかったのか。ケアマネジャーが訪問介護を入れた根拠を確認できれば、そのあたりのことがわかりますよね。今日はこのケースの専門員の方もいらしているんですよ。退院直後の状況について、何か情報はありますか？

専門員 はい。もともとケアマネジャーがかかわり始めたのは、私と障害福祉課から依頼したという経緯があります。訪問介護の週2回2時間の内容は、基本的には見守りです。というのも、退院直後ということもあり、本人は「できる」と言っていたのですが、内心不安を強く感じているのが見てとれましたし、実際、精神的にはかなり不安定でした。

奥川 専門職としては、どんなところが心配だったのですか？

専門員 やはり、それまではご主人と暮らしていて、ご主人がかなり本人の精神症状を抑えていたところがあったようですので――。

奥川 それで、ご主人が亡くなってつかえ棒がとれてしまった。

専門員 はい。ご本人が入院中にご主人が亡くなってしまったので、退院したときは実質的に初めてのひとり暮らしといってもいい状況でした。でするので、せめて見守りをしようということになりました。

奥川 ありがとうございます。退院時の事情が見えてきました。やはり不安定だったようです。

最近の状態について

奥川 Tさんがかかわったときはどうでしたか？

Tさん 担当を前任者から引き継いだときは、すでに「病状も安定していて何も問題はない」ということでした。

奥川 実際は？

Tさん たしかに記憶力もよく、お金も1円単位で覚えていきますし、計算もできます。

奥川 寄付をしたときにも全額を出すのではなくて、半分は残していますね。かなり力のある方ですよ。

Tさん はい。

奥川 今現在、日常生活動作は自分でできているのですか？

Tさん はい。食事も自分で作っていますし、掃除も入浴も自分でしていらっやいます。

奥川 最近、訪問回数を週2回から1回に減らしたのはなぜですか？

Tさん ご本人は「ヘルパーさんはもういらない」とおっしゃったのですが、ケアマネさんとしては「まだ不安なので」ということでした。

奥川 なるほど。そしてTさん自身も地権事業の必要性を感じているんですよね。

Tさん はい。

奥川 どんなときにそれを感じましたか？

Tさん 生活費を管理している通帳を返してほしいと言われたり、今までは通帳に入れていたお金を自分の財布に入れたりということがありましたので、少し不安になりました。

発言 そのことに関連して気になったのは、ドクターがご本人の状態をどうとらえているかという点です。10月14日に「向かいの人が気味が悪い」とご本人が言って、Tさんは「少し不安定に見える」と思っているわけですが、その1週間後に病院から「状態が安定しているので転院を考えている」という連絡が入っています。ところが、その後またご本人は「向かいの家の人が便の水を流している」とわかりにくいことを言っています。このあたりのズレはどのように考えていますか？

Tさん ご本人に「先生とお話していますか？」と聞いても「病院の先生は全然話なんか聞いてくれないのよ」とおっしゃっていたので、先生には気になっていることなどはお話しされていないのかな、と思いました。

奥川 妄想の頻度や程度はどうか？ 周囲とのいさかかが起きたりはしていないのですか？



Tさん はい。そこまでは言っていません。

発言 近所の方たちが「ひとりでやりくりしてみたら」とか「地権の必要性があるの?」とおっしゃる背景はわかりますか?

Tさん もともと入院につながれたのは近所の方なので、私も矛盾を感じているのですが……。

奥川 今のはとても大事な質問ですね。今答えていてどう思いました?

Tさん 病気のことをわかっているから入院させたのだと思っていたのですが……。

奥川 でも、少し状態が落ち着くと「地権は必要なのでは?」と言い始めたということは?

Tさん 近所の方たちは病気について理解していない……。

奥川 そうですね。少なくともその可能性がりますね。その点を押さえておくことは大事です。

Tさん はい。

セルフマネジメント能力について

奥川 では、ここまでのやりとりで明らかになった情報をもとに意見交換に入りましょう。Tさんが生活支援員としてこれからかかわるにあたって、どのようなことに気をつけながら支援を進めていけばよいでしょうか。ご意見をお願いします。

発言 先ほど、ドクターはあまりご本人の状況を把握されていないようなお話がありましたので、新しく主治医になったクリニックのドクターには、ケアマネさんからでもいいと思うのですが、情報を伝えることが大事ではないかと思っています。

発言 私も同じことを思っていました。先生に理解していただくことも大切です。逆にTさんが、たとえばご本人がのんでいる薬の

特性などを知ると、ご本人の気持ちにもっとより添った支援ができるのではないかと思います。

奥川 大事な点ですね。現在、薬も含めてこの方の健康と生活のコーディネートをしているのはどなたですか?

Tさん 本人、でしょうか……。以前、手の震えがひどくなったときは、自分で先生に言って薬の量を調整してもらったようです。

奥川 ご主人がいらっしゃる頃はご主人がサポートしていらしたのでしょうか、退院後は実質的には自分で管理していたわけですね。

Tさん そういふことだと思います。

奥川 では、最近のご本人の状態から考えるとどうですか? ご自分で病気の管理ができる力をもっていると思いますか?

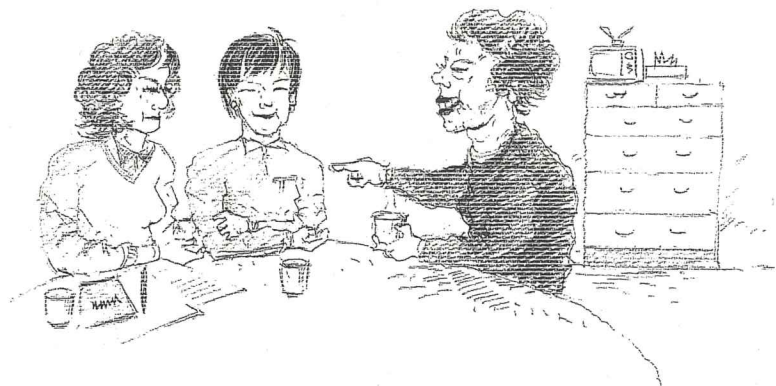
Tさん 正直、難しいと思います。

奥川 日常生活のいろいろなことはバラバラにできるけれども、トータルに自分の健康、生活を守るのはちょっと怪しいということですね。

カンファレンスについて

奥川 では、今後、どのようにサポートしていけばよいでしょう。その体制をどうやってつくっていきましょうか。

Tさん 近いうちにカンファレンスを開こうという話にはなっています。



奥川 いいですね。カンファレンスにはどんな方々が参加する予定ですか？

Tさん 私たち地権の専門員、生活支援員のほか、ご本人、ケアマネジャー、障害福祉課、ドクター、ヘルパーさんを考えています。

奥川 宗教関係の近所の友人は呼ばなくてもいいですか？

Tさん なるほど……。

奥川 どうして近所の友人にも出てもらったほうがいいかわかりますか？

Tさん 先ほど話に出たように、近所の友人たちももしかするとご本人の病気について理解が不十分かもしれないので、カンファレンスのなかで理解を深めていただくため、でしょうか。

奥川 そうですね。それと、この方の日常生活を支える上では近所の方々は大きな役割を担っていらっしゃるから、専門家の仕事について理解していただいたり、役割分担をすることも重要ですよ。

Tさん はい。よくわかりました。

奥川 専門職のなかでは、誰がこの方のニーズをトータルにとらえてコーディネートしますか？

Tさん ケアマネジャーです。

奥川 ケアマネさんは精神的な疾患や症状の変化などをとらえられる方ですか？

Tさん ケアマネ自身は福祉系の方なので難しいと思いますが、障害福祉課の保健師にもチームに入ってもらい、かわりをもってもらうことになっています。入院中も何回か訪問されていた方で、ご本人とも面識はありますし、精神科のクリニックとの連絡もとっていただく手はずになっています。

奥川 なるほど、医療面のバックアップは大丈夫そうですね。

どこに留意してかわるか

奥川 では、Tさん自身はどのように支援してい

けばいいでしょう。見えてきましたか？

Tさん 一応、ご本人とのコミュニケーションはとれていると思いますし、それなりに信頼してくださっていると思うので、万が一、3カ月後に月々の生活費を管理する通帳を預かせてもらえなくても、引き続きかわることと、何か事が起きたとしても大事になる前に発見することはできると思います。ただ、「管理されている」と思われないようにするには……。

奥川 この方は40歳のときにうつで入院、50代で注察妄想と睡眠障害、60代でまたうつで入院しています。その時々になにかきっかけで状態が悪くなったのかは聞いていますか？

Tさん ……いえ、聞いていません。

奥川 その点を確かめられれば、どこに気をつければよいかチェックポイントがはっきりして、ご本人に束縛感を与えることなく支援していくことができるのではないですか？

Tさん なるほど——。そのとおりだと思います。

奥川 Tさんは、相談援助の仕事について間もないということですが、とても感度のいい方だと思います。幸い信頼関係はできているようですから、これからご本人とかかわるなかで、どういう状態のときに病状が悪化するのかという点に留意してかわっていけば、よりよい支援ができるようになると思いますよ。では、最後に感想をどうぞ。

Tさん 皆さんに検討していただいたおかげで、自分自身の漠然とした不安の根底には、病気に対する理解が不十分だったことがあったと気づくことができました。私の側に不安があるせいで、ご本人に「管理されている」と感じさせてしまっていたのだと思います。これからは、他の専門職や近所の友人の方々と今まで以上に連携をとりながら、先生におっしゃっていただいたように、どういう状況のときにご本人がストレスを感じるのかといった点に注意してかわっていきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。